

いのち

こばやし
小林
みなこ
美奈子

●日本教職員組合 書記次長

今、世界には多くの「差別」が存在し、悲しみや苦しみ、痛みに耐えている人々がいる。「差別」には、歴史的に長いもの、つくられたもの、社会構造的なものがあり、一人ひとりの価値観にもとづいたりもするから根深い。さらには、時代の変化にともない形や方法を変えて深刻化している。これはこの国においてもあてはまり、私のすぐそばにあることを感じている。

私が生まれる前から続いたたかひに、ご縁あって参画させてもらい、そこで出会った人々から「ひとの尊厳」について考える機会をもらっている。

進学の時、差別されると可哀そうだからと、現住所を変えて書くように先生に言われた。その時代には、解放教育がなく、就職してからも差別を受け、苦しくて、悲しくて、うつむいて生活していた日々。やがて職場に労働組合ができ、人々がとりわけ上司が、学習を積み重ね、死ぬほど苦しかった環境が変わり、救われたという体験を聞いた。

「もう隠さなくていい、人は正しく知れば変わる」「私が差別を隠すことは、差別を拡散してる。そんなこともいろいろ気がついたんです」「私自身が解放されて、生きる希望がもてたのです」とも。

この話の主は「狭山冤罪事件」で60年もの歳月たかかってきている石川一雄さんのおつれあいの早智子さん。今、狭山裁判闘争は、大きな山場を迎えている。開示請求によって新たに明らかになった証拠は190点を超え、60年の訴えは、冤罪の壁を崩そうと、大きなうねりをあげ

ている。

冤罪によるこの60年間は、想像を絶する。高齢となった一雄さんの「見えない手錠」を外させるまで諦めない。一雄さんが不当逮捕された日と無期懲役を受けた日の市民集会へは、毎年全国から大勢が参集し、世論に訴えるため声をあげて行進している。これまで、再審を求める署名120万筆以上と、昨年には事実調べを求める緊急署名51万筆が、裁判所に提出されている。

一雄さんは、ものすごい歩数のウォーキングを欠かさない。冤罪を晴らす日のため、その先、全国のみなさんに元気な姿でお礼を伝えるためなのだそう。

部落差別のせいで文字を覚える機会をも奪われていた一雄さん。当時の一雄さんに脅迫状は書けなかったのに身内を守るために自白を強要された。一雄さんは、獄中で文字を覚え、多くの手紙を書いたという。学校の先生には「私にならないように一人ひとりの子どもを見てほしい」、子どもたちには「私にならないように一生懸命勉強してほしい」と。そして今も「一番重要なのは教育だ」とお話される。痛く重い言葉。このことを多くのなかまや伝えうる限りの人々に知ってほしい。伝えなければと思う。そして、一刻も早く一雄さんが自由になる日をと願ってやまない。

今、強烈にいのちの尊さを感じている。差別はあかん、差別されるのは嫌と思うとき、自分は、大丈夫か？違うところで、自分の中にある差別を許してしまっていないかとも思っている。